

TSしてゲーム廃人になりました

さつちゃん☆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

性転換病にかかって女となり、今まで交友関係を築いてきた人達との関係がめつきりなくなつた橋 空は、あまりの辛さに引きこもりゲーム廃人になってしまった。

ある日いつものようにオンラインゲームをプレイしていると、よく一緒にゲームをするまぐまさんから1件のチャットが。

これをきっかけに空の日常は少しづつ変わっていく。

この作品は小説家になろう様でも投稿しています

目

次

はじめの0歩								
1話	お風呂							
2話	こころがわり?							
3話	せんにゅう!							
4話	おふかいつ!							
5話	遊びに行こう							
6話	ゲームセンター							
		48	39	30	21	14	8	1

はじめの0歩

「どこ見てんだ！ こつちだバーーカ！」

俺は自室のパソコンの前でゲーミングチェアに座りコントローラーを握りながら対戦相手を小馬鹿にしたような言葉を吐く。

そしてゲーム内のキャラクターを操作しAR（アサルトライフル）から弾を連射、見当違いの方向を向いていた相手のキャラクターはなす術なく倒される。

『ナイスソラ！』

『さっすがあ！』

『やるねえ！』

「へへーん、残り2人も俺がキルして終わりだぜ」

その直後にヘッドホンから仲間から賞賛の言葉が聞こえ得意げに鼻を鳴らす。

殺した敵の死体の周りを動き回り近くに潜んでいるであろう残りの敵を索敵する。

一バンバンバン！

するとヘッドホンから銃撃の音が聞こえ咄嗟にキャラを後ろに振り向かせる。壁の隙間にマズルフラッシュの光を確認、このままARで撃ち合っても先手を取られていては撃ち負けるため武器を片方のSR（スナイパーライフル）に変更そのままスコープを覗き込み弾丸を撃ちだす。

「ヘッショもらいい!!」

甲高い音と共に撃ちだされたSRの弾丸は相手の頭を撃ち抜き相手のキャラは即死、俺のキャラは防具を着込んでいたおかげでなんか生き延びた。

「あと一人！」

『見つけた！ 東方向』

『しゃあっ！ ラスキルもらいい!!』

『あー!! ラスキル取られたあ!!』

最後の敵は味方が見つけてくれたらしい。少し遠くでARを連射

する音が聞こえるとそのまま画面に”友軍が敵を撃破しました”と文字が表示される。これで最後の敵を撃破、俺達の勝利だ。

「よーし勝つた勝つた！」

「これで3連勝！」

「今日は調子いいねえ」

昨日の対戦の勝率は6割くらいだつたのに對して今日は9割近い勝率を出しているため皆機嫌が良さそうだ。かくいう俺も上機嫌だ。

「今日はなんか調子いいしもう一戦いつとくか？」

俺は笑いながら仲間にそう話しかけ、再戦する。を選択しようとする。

今はまだ夜の9時だ。いつもは12時過ぎまでやつてているしままだ続くだろうと思つていた。

昨日はあまり勝率が良くなく萎え落ちといった形で10時半頃に終わつてしまつたが、今日は好調だからもしかしたら朝までやつてるかもなんて考えていた。

「あー、わりい明日日直だから遅刻できねえんだわ。今日は早めに寝ることにするわ！おやすみ！」

が、メンバーの1人がそう言つてゲームからログアウトする。

「そういうや僕も明日日直なんだよねえ、ぴーすけも落ちちゃつたし僕も落ちる事にするよ。ソラまた明日ね」

「ありや、2人とも落ちたのか。俺は別に遅刻したつて構わないんだけど、流石に2人だと野良2人入れなきやできねえし俺も落ちるわ

＼

ぴーすけがログアウトするとそれに続いてあるふあーもログアウト。そしてまたそれに続いてまぐませんもログアウト。

結局俺以外は全員落ちてしまつたので俺も仕方なくこの【4t04（通称よんよん）】からログアウトする。

そしてパソコンの電源を落とし、通話するため、ゲーム音漏れを防ぐために付けていたヘッドホンを外し、そのまますぐ横にあるベッドに飛び込む。

周りを見渡せばカップ麺カップ焼きそばジュース缶のゴミが入つ

たゴミ袋が散乱しており。自らの不健康さがありありと見てとれる。

不健康であると自覚しているにもかかわらず新たな缶ジュースを手に取り蓋を開け喉奥に流し込んでいく。

「んぐつ……んぐつ…ふはあつ！」

りんご味のジュースを飲み終え、空になつたジュース缶をゴミ袋へ投げ入れる。

ゴミ袋にまた新たなゴミが追加され袋がその分膨らむ。こんな部屋で生活をしていればいつか病気になつて死んでしまうかもしれない、と思つてるし、むしろそうなればいいのにとまで思つていた。

「寂しいなあ……ちくしょー…」

枕に顔を埋めて呟いた声はゲームをしていた時の声とは真逆と言つていいほどに高いソプラノボイスだつた。

それはそうだろう、さつきまでは自分のこの声を誤魔化すためにわざわざ買つたボイスチェンジャーを使つていたのだから。

何もネバベをしているだとかそういうわけじやないし、かと言つて性同一性障害だという訳でもない。いや、今の現状を見ればそうなかもしれないが元々俺は男だつたのだ。

何を馬鹿な事をと思うかもしれないし、ネバベをしていてこじらせたのか？と思うかもしれない。俺も他人がこんなこと言つてたらそう思う。

だが、本当にそうではないのだ。

性転換病、という病がある。社会の認識では単なる割と有名な都市伝説としか言つてゐないが、この読んで字のごとく性別が変わつてしまふ病気は実在する。それはこの俺が身をもつて証明している。

最初の症状は微熱だつたり体のあちこちがチクチク痛んだりしただけだつた。

だから俺は風邪かなにかだらうと思つて薬を飲んで寝ていた。

しかし一向に症状は良くなる気配を見せず、それどころか熱は39度を超える、体は内側から破られるような痛みを感じた。

流石にこれは風邪ではないと母さんが救急車を呼び、俺はそのまま病院へはこばれた。

病院に運ばれた後、俺は痛みに耐えきれず気絶し。それから2日経ち、目を覚ますと女の身体になっていた。というわけだ。

目が覚め、まだ頭が目の前の光景を受け入れることが出来ていないと、状態で俺はこの病気について、今後の対応について聞かされた。

この病気の発症率は1000万人に1人と極めて低いこと。

この病気の治療法は何もないということ。

男から女に変わったことにより、別の戸籍が用意されたということ。

そして男だった頃の俺は死亡扱いになる。ということ。

この病気にかかった者は政府から多額の援助が得られる。ということを説明された。

死亡扱いになつた理由は、なんでもこの性転換病が世間に露呈すると面倒な事になる。俺が元男だとバレると今後の生活に支障をきたす場合がある。という理由から、政府から援助があるのはこの病氣にかかつたものは変わつた身体になれるまでに大きな時間がかかるため、そしてこの病氣を公にしないようにという口封じの意味も込められているらしい。

言いたいことを言うだけ言つたスーツ姿の男達は、そそくさと出でいつてしまい、病室には俺と母さんの2人だけが取り残された。

その後俺の事を聞きつけた父さんが顔を真っ青にしながら病室に飛び込み、俺と母さんの説明を受けて泣きながら俺を抱きしめてくれた。

それでもう俺は限界だつた。いきなり身体が変わつてしまつたこと、男の俺が勝手に殺されてしまつたこと、これからどうしたらいいのか、これからのが不安になつて怖くなつて大泣きした。

ふざけるな、なんで俺がこんな目に、と何度も思つたが、どれだけ叫ぼうが喚こうが身体が元に戻ることはなかつた。

それから3日ほど経つてようやく自体を全て呑み込むことができ、母さんから看護婦さんから女の身体、しくみについて教えられた。

一番辛かつたのはトイレの仕方だ。実の母親に15?にもなつてトイレを手伝つてもらうのは悶えるほど恥ずかしかつた。あれ以上

恥ずかしい経験はそうそうないだろう。

それからまた1週間ほど経ち、ようやく俺は自分の身体に多少なりなれることができた。最初のうちは背が低くなりそれに合わせて手足も短くなっているため取ろうと思つたものが取れなかつたり、うまく歩けず何もないところで転んだりして凄い苦労したが、慣れれば距離感を間違えることも何もないところで転ぶことはなくなつた。

身体が問題なく動くようになり、俺は退院を許可された。

これでようやくくつろげる。と思ったが、まだ俺の葬式が残つており、否応なしに葬儀場へ連れていかれた。

俺の葬式には結構な人数が来ており、親友の竜や数馬、浩輔。3年生の時担任だった田中先生やよく買い物に行つていた肉屋のおばちゃんや八百屋のおじちゃんも来てくれていた。

「高校で一緒にサッカーしようつて言つたじゃねえかよ…！」

「今度一緒に行くはずだつたキヤンプ、楽しみにしてたんだぞ…お前無しでどうやつて楽しめつていうんだよ…！」

「死ぬにはつ…早すぎるだろつ…！…早すぎるだらうが…！」

「橘あ…！ 先生に子供見せてくれる約束だつただらうが…！」

「空ちゃん…今度店に来た時はコロッケサービスしてあげるつて言つたわよ…早く取りにこないとおばちゃん忘れちやうよ…！」

「空坊…俺はお前が買い物に来るのをよく楽しみにしてたんだぜ…楽しそうにいろんな話を聞かせてくれてなあ…ホントに年寄りの少ない楽しみだつたんだぜ…！」

この時が生まれてから一番辛かつた。親友との約束を破つてしまつたこと、先生とした約束を果たせそうにないこと、おばちゃんやおじちゃんに悲しい思いをさせてしまつたこと。

皆が泣かないで済む方法があるのに、それを実行できないのがとても辛かつた。

この場で本当は生きていると、私が、俺が橘 空だと、そう言えればどれだけ良かつただろうか。でも言えないし言つたところで信じてもらえない。それが俺は一番辛かつた。

そして、葬式が終わつた時、橘 空は死んだ。という事実が心の中

にすとんと落ちてきた。そして怖くなつた。

俺が橘 空として築いてきた色々な人との関係が全てなくなつてしまつたからだ。

もう竜達は友達じゃない。田中先生は俺の元担任ですらない。肉屋のおばちゃんも八百屋のおじちゃんももう俺の事を知らない。

そう思うとひとりぼっちになつたようで酷く怖かつた。

俺の葬式が終わつたあとはもうすることはなくなり、俺は家でぼーっとすることが多くなつた。

偶に外に散歩に出かけるくらいでそれ以外はずつと家にいた。

葬式から1ヶ月程経ち、俺は久しぶりに外へ出ることにした。家にずっと籠つていても気が滅入るだけだし、少しは気分転換でもしようということで、よく遊んでいた大きなグラウンドがある公園にサッカーボールを片手に向かつた。

小学校の頃父さんに買つてもらつたお気に入りのサッカーボールを蹴り、グラウンドを走り回る。

ドリブルやシュート、リフティングを終え、十分すぎるほどに汗をかいたのでそろそろ切り上げて別の場所へ行こうとしたんだ。

すると、よく遊んでいた竜、数馬、浩輔がサッカーボールを持ってグラウンドに入ってきた。

俺は1ヶ月前に自分の葬式をしたことも忘れて、いつものように竜に話しかけてしまつた。

「竜、知り合いか?」

「えーなになに、竜こんな可愛い子と知り合いだつたの?」

「いや…俺はこんな奴知らないけど…お前誰?」

竜達の反応は当たり前の反応だつた。

でも、俺はそれを受け入れることができなかつた。男の俺が死んだということをまだ受け入れることが出来ていなかつたんだ。

俺は竜達の反応に耐えきれなくなつて、その場から走り出して逃げた。情けなく涙と鼻水を垂らして家の玄関に飛び込んだ。

俺の居場所はとつくになくなつてた。俺の事を知つてるやつは誰もいなくなつっていた。

俺は橘 空なのに橘 空じゃないんだ。

でも、その事実を受け入れられるほど俺の心は丈夫ではなかつた。それ以来俺は外に出ることが怖くなり、そのまま引きこもつてしまつた。

政府からの援助金が俺の一生分の生活費を軽く超えていた事も俺の引きこもりに拍車をかけた。

しかし、寂しがり屋と周りによく言っていた性格の俺がその生活をいつまでも続けられるわけもなく、1週間経たずしてネットのコミュニケーションツールに手を出した。

そしてぴーすけ達と出会い、よくチャットでも話すようになり、仲良くなるにつれて通話もするようになつた。

ボイスエンジヤーを使えば男の声も出せるし、元より男だつたのだから文章が女っぽくなることは無かつた。

だから皆俺を男と信じて疑わなかつた。それが嬉しかつた。ネットの中なら俺は男のままでいられる。ネットの中なら俺は橘空のままでいられる。

そうして俺はネットの世界にのめり込んでいき、今のような生活を半年続けている。

「皆寝ちまつたし、俺も寝よう…。」

いっぱいになつたゴミ袋をぎゅっと締め、部屋の隅に押し出して布団に潜り込む。

そのまま目を瞑り眠りにつこうとしたが、枕の横に置いていたタブレット端末がピロンと通知音をたてる。

「んく…誰だ？ つてまぐませんか。なんだいつたい？」

先程落ちたはずだが何か言い忘れたことでもあるのだろうか？

そんな疑問を抱きつつも個別チャットの部屋に入り、メッセージを確認した。

『今週末ぴーすけ、あるふあ、俺でオフ会をやるんだがお前も来ないか？』

このメッセージが俺が変わるひとつのかつけだつたのかもしない。

1話 お風呂

『少し考えさせてくれ』

これが俺のまぐさんの質問に対して30分かけて考えた返答だつた。

チャットを送ると数十秒でピロンと再び返信の音が鳴る。

『分かつた。だけど明日までには決めておいてくれ』

『了解』

『じゃ、おやすみ』

『おやすみ』

チャットのやり取りを終え、俺はタブレット端末の電源を切る。そのままごろりと身体を仰向けにし睡眠の体制に入る。

「（オフ会か…そういうひと月くらい前に言つてたもんなあ…）」「行きたくない。と言えば嘘になる。

半年ほどの付き合いだが、大分仲良くしているし、趣味だつて合う。話していく1番楽しいと思える人達だしきつと実際会えば来月発売される新作ゲームの話や今やっているアニメの話、よんよんのアップデートで何が来るのか?なんて話もしたい。

だが、それと同時に会いたくない。とも思つている。
理由は単純、会えば俺が性別を偽つていることがバレてしまうからだ。

俺が騙していたことがバレればきっとぴーすけ達は怒るだろうし、もしかしたら話すこともできなくなるかも知れない。俺が男として過ごせる場所がなくなってしまうかも知れない。

それだけは絶対に嫌だつた。

「（うん……ぴーすけ達には悪いけど断ろう）」

別に合わなくたつて話は出来る。いつもの4人から自分だけ外れるのは少し寂しいが、それでもバレるよりはマシだろう。

とりあえず明日、まぐさんに断りのチャットを入れようと心に決め、もう一度布団を深く被りなおす。

チラリと横目でゴミ袋だらけの自室を眺め、少し寂しい気持ちにな

りながら、俺はゆっくりと夢の中へ落ちていった。

■ ■

「ん……もう、朝か…。」

カーテンの隙間から差し込む光に目を刺激され、俺はゆっくりと目を覚ます。まだ眠たいし寝起きで意識もはつきりしていないが、このまま布団でぐずつて二度寝してしまふとなんだか時間を無駄にしているようで嫌だつた。

引きこもり自体が時間の無駄だと言わればそうなのだが、そういう時間の無駄とは何か違う気がする。

とりあえずさつさとまぐまさんに断りの連絡を入れておこうと俺はタブレットの電源を入れる。

タブレット内の時計を確認すると時刻は既に11:00を指しており、どれだけ惰眠を貪っていたのかが分かる。

自分のだらけ具合に少し苦笑いを浮かべながらも、俺はチャットアプリを開いて、まぐまさんとの個別チャットを開く。

「えーっと…とりあえず『色々考えたんだけど今日はやめておくわ、またやる時都合が合えば行くよ』…これでいいか

都合なんて一生合わない癖に、と自虐気味に笑いながら俺はまぐまさんへチャットを送る。

後はまぐまさんの返信を待つだけだ。

俺はタブレットをスリープモードにして、ベッドでコテンと横になる。

「はー…」

横になりながら髪をくるくると弄る。長く伸び、真っ白な髪は半年前の俺の髪とは思えないほどにサラサラしていた。

ここまで身体に悪い生活をしているのにまるで影響を受けていないのはなんでだろうか?なんて疑問を抱きながらも、まあパサつくよりはマシなのかなと疑問を断ち切る。

「ホント、髪の色まで変わっちまつて…」

元々俺の髪の色は黒だったのだ、間違つてもこんな雪のような白ではない。俺は身体が女になると同時に髪の色と長さも変わつてしま

まつたのだ。

医者曰く、高熱、身体の激しい痛みのストレスによつて脱色してしまつたのではないかと言われている。政府のお偉いさんも今まで性転換病にかかつた者は髪の色が変わるものは多いと言つてた。

「あ、枝毛発見」

自分の髪を手に取つて眺めていると、数本の枝毛を発見した。他の髪が綺麗なことも合わさつて余計に目立つ。

そんな事をしていると、自分のお腹からぐうぐう、と音が鳴る。

「お腹すいたしなんか食べよつと」

どんな時でも体は正直だなあと想いながらベッドに貼り付いていた己の身体を剥がす。ダボダボのTシャツ1枚を身に纏つた姿のままで俺は自室の扉を開けゴミ袋を持つて外に出る。

今は父さんも母さんも仕事に出かけてるし俺のこの格好を咎める人はいない。

ペたペたと足音を鳴らしながらリビングに降り、ゴミ袋を裏口から外に放り、そのまま冷蔵庫漁りに移る。

「あ、そういうや今日は出前かなにか頼んどいてつて言われてたつけ」そう言えばそうだつた。昨日母さんは「明日は朝早くから行かなくちや行けないからご飯は出前かなにか取つてね」と言わっていたんだつた。

別に出前なんか取らなくてもカツップ麺でもあればいいのだが、あの手のものばかり食べていると両親が大泣きするから1日1食以上は普通のご飯を食べることにしている。

「でもなあ、丼とかピザつて気分じやないんだよな」

チラシを手に取り眺めるが、あまり心を惹かれるものは無い。なんというか今は微妙なものばかりだ。

これは嫌い、これの気分じやない、これは好きだけど今日は別のが食べたい。とわがままを言つていると、とうとう最後のチラシになつてしまつた。

これで何もなければ適当に無難なものを頼もうか、と思つていたがどうやら当たりを引いたようだ。

「おつ、いいじやんお好み焼き、今はこういうのが食べたい気分だつたんだよ」

俺はチラシに書いてある電話番号に電話をかけ、お好み焼きを一人前注文する。

どうやら30分くらいで届くようだ。

「30分かあ、1戦するには長いけど2戦するには短いんだよなあ」待つ間の暇つぶしにすぐ4t04が思いついたが、試合中に出前が来ても中断できないので却下。アニメでも見て時間を潰そうかとも考えたが、この前見たかったシリーズは完結まで見たばかりなのだ。

「……そういうや、俺昨日風呂入つてねえや」

どうやって暇を潰すか考えていたが、昨日4t04に熱中して風呂に入るのを忘れていたことを思い出した。

いつもなら1日くらいと気にしないのだが、出前を届けてくれた人に汚い今まで受け取るのは良くない。

丁度暇なのだし、入つておいてもいいだろう。

「しゃーねえ、ちやつちやと入るか」

俺は自室から適当な着替えを引っ張り出し、浴室へ向かう。

着ていたのはTシャツとパンツ1枚だったのではぱつと脱いで風呂へ突入。

ちなみにTシャツはなんの変哲もない無地で白色のTシャツで、パンツは男の頃にも使用していた黒のトランクスだ。

レバーを倒して水を流す。まだ温水になつていなため飛び散つてきてとても冷たい。

「半年経つても、これが自分の体とは思えないよなあ…」

チラリと鏡を見ると、シミひとつない色白の肌が映つていた。男だつた頃は傷もあつたし日焼け跡もあつたしなんならシミだつていくつかあつた。

だが、性転換病によつて体が作り替えられたせいでこんな男らしくない肌になつてしまつた。

「やっぱ…龜頭目に見なくとも可愛いよな…」

男だつた頃の自分の好みからすればこの姿は間違いなくドスト

ライクだ。色白の肌に艶のある髪、出るところはそこそこにでいて、引っ込むところは引っ込んでいて、それに加えてちょっと気の強そうなつり目は正直言つて100点満点だ。

「はあ……これが自分じやなきやなあ……！」

しかしどれだけ好みであっても自分であつては意味が無い。再びはあ、と溜息をつく。

初めのうちは自分の体であつても慣れなくてドキドキしたし、見え隠れする桜色には大分ドギマギさせられた。

だが、半年もこの体と付き合えば嫌でも慣れるというものだろう。今ではトイレをするのも風呂に入るのも問題なく出来ている。

「あ、あつたかい」

そういうしているうちに冷水がお湯に変わつた。待つてましたと髪から流し始める。

一通り髪や体を流し終え、シャンプーを手に取り泡立てる。そのままわしゃわしゃと雑に洗つていく。頭を力強く揉み込むようにして洗うこのやり方は男の頃と全く変わつていない。そのまま残つた泡で後ろ髪を撫でるようにしてパパッと洗う。

こんな洗い方をしているというのに髪が荒れることもなく枝毛が数本あるくらいのは結構不思議だ。まあ、丁寧に洗わないとボツサボサのぐちやぐちやになるよりは楽でいいのだけども

洗い終わつたらシャワーでザバザバと泡を落としていく。

完全に泡が落ちたら次は顔だ。体にペたつと引っ付く髪に多少の不快感を抱きながら洗顔フォームを手に取り、顔に塗つていく。少しスースとする感覺に気分の良さを覚えるが途中から偶にヒリヒリするのもしかしたら肌に合つてないのかも知れない。

まるでパックをしたかのように顔面が真っ白になつたら、お湯を手に貯めてパチヤパチヤと顔にぶつけていく。

「ふう、すつとしたぜ」

顔の泡を流し終え、つやつとした肌をペチンと叩く。

さあ、最後に体だ。昔はボディタオルでゴシゴシしていたのだけど、そうすると肌が赤くなつてヒリヒリするからやめている。

この分だと日焼けも酷いだろうから外に出る際は日傘をさした方がいいのかもしない。まあ、今は引きこもつてるので日焼けすることもないだろうが。

ボディソープを同じように手に取り、首からゆっくりと洗つていく。脇や足首足裏などの汚れが溜まりそうなところは重点的に洗つていく。

「ふつ……んつ……んんつ……」

この体になつて半年経つが、未だに胸や秘部を洗うのは慣れない。なんだかむずむずと変な感じがしてくすぐつたいのだ。

胸はいいが秘部は嫌でも汚れるので重点的に洗わなければならぬのだが、若干所ではない抵抗感があるのでいつも目を瞑つてちやつちやと洗うようにしている。

「ふうつ……うううう……！　ダメだ！　これ以上続けてたらおかしくなりそうだ！」

少しづつ頭がピリピリしてきたので怖くなつて中断。妙に熱い身体にシャワーを思いつきりぶつけていく。

体の泡が流れていくのを眺めながら、深呼吸をして息を整えていく。

鼓動の早くなつた心臓がゆつくりと元の落ち着きを取り戻し、トクン…トクン…と一定のリズムを刻む。

「あー……洗つててこんな風になつたの初めてかも……」

ヤケに疲れたようなぐつたりとした表情を浮かべ、風呂の椅子に座り込む。

ちよつとひんやりしているが、少し火照つた体にはちようど良く気持ちがいい。

「……なんか、ちよつとだけ大人になつた気がする……」

なんだか変な気分になつたまま、俺はバスタオルを取ろうと浴室の扉を開けた。

2話 こころがわり？

「はひー…さつぱりした…」

風呂から出た俺は、髪と顔と体を拭き、湿ったバスタオルを洗濯機の中に放り投げる。

今季節は秋に近づいてきている9月頃ということもあつて少し肌寒い。いつまでもこんな素っ裸の格好でいては風邪を引いてしまうので、そそくさと棚から自分のパンツとシャツを取り出す。

最近は長袖を着ることが多いのだが、今日は妙に身体が熱く感じるため半袖に変更。

「ん…しょつ…と…うへ、やつぱぶつかぶかだこれ」

男だつた頃に着ていたシャツなのでだいぶ今着てみると大分ぶかぶかだ。少し掴んで伸ばせば膝まで隠れてしまうかもしない。

まるで父さんのシャツを借りてるみたいだと苦笑いしながら、持っていたトランクスタイルのパンツを履き、横のハンガーにかけてあつた短パンを装着。

一応の着替えが終了すれば、次はドライヤーをあてる作業に移る。

「コレもめんどくさいよなあ」

そうぼやきながら、ブオオオオオオという音を立てるドライヤーを手に取り、髪に温風をあてていく。

半年前なら自然乾燥でなんの問題もなかつたのだが、今は放つておくと服に湿つた髪が当たつて濡れて気持ち悪くなるし、髪が目に見えて傷んでくるので、めんどくさいのを我慢してドライヤーをあてる。

水気の残っている髪の毛を取り、温風をぶつけ続ける。

本当は、ある程度水気が抜けるまでバスタオルかなにかで髪を纏める、包んでおくといいらしいのだが、あいにく俺はそんな高等な技能は持っていない。母さんに聞けば多分教えてくれるだろうが、別にそこまで自分の髪にこだわりもないのに放置している。むしろサラサラしすぎていると余計に女みたいになつて嫌だつた。

—ピンポーン

そうこうしていると、どうやら出前が来たみたいだ。まだ少し水氣

が残っているが、待たせるのは届けてくれた人に悪いと思い。ドライヤーのコンセントを引っこ抜いて玄関へ財布を持つてダッシュ。

「一応除き口から宅配かどうかしっかりと確認して、ドアを開ける。

「あ、お好み焼き屋のヒロシマで……す……!?」

「あ、はい。ありがとうございます。おいくらですか？」

ぱっとサンダルを履いて受け取りに出たのだが、何故か宅配の人が固まってしまった。どうかしたのだろうか？まさか、量を間違えたとかそういう訳もあるまい。

「あの……どうかしました？」

「あつ……！ああ！いえ！なんでもないです!! お好み焼き1人前で750円です」

「はい、750円丁度です。確認お願いしますね」

値段はチラシの方で確認していたので、財布からサツと丁度の金額を取り出し手渡す。

「で、では確認させていただきますね。 いちにーさんしーーーろくなな……はい、ちょ、丁度750円ですね、ありがとうございます」「（ゞ）苦勞様です」

俺は小銭と引き換えにお好み焼きの入った袋を受け取る。

「あ、あの。失礼ですけど……そんな格好で外に出られるのはやめた方がいい……ですよ……？ 変な人に襲われでもしたら大変ですから」

宅配の人はお金を受け取ると、チラチラと俺を、正確には俺の足を見る。

なるほど、この人もしかして俺が下に何も履いてないと思つたのか、確かに今の格好は上のシャツがデカいせいで下の短パンは隠れてしまうから見方によつてはそう見えてしまうのがもしそれない。

確かに下に何も履いてない人がいきなり出てきたら困惑するだろうし、この人が少し固まってしまうのも仕方がないだろう。

「あはは、大丈夫ですよ。ちゃんと下は短パン履いてますもん」

流石にノーパンやパンイチで外に出るほど俺も馬鹿じやない、クスリと笑いながら下の短パンを見せつけるようにチラリと服をめくる。「つ!？」

「ね？ 何も問題ないでしよう？」

「あは、あはは…そうですね。ありがとうございました！ またよろしくお願ひします！」

どうやら、分かつてくれたのか宅配の人は頭を下げて走り去つていった。チラツと見た顔が真っ赤だつたけど風邪でもひいていたのだろうか？ ちょっとだけさつきの人を心配をしながら、俺はお好み焼きを持つて家中に戻る。

「変な人。ま、いいや腹も減つたしさつさと食べよう」

ボケつとしててお好み焼きが冷めたら最悪だからな。

ドアを閉め、鍵をかけてリビングの方へ戻る。

テーブルにさつき受け取つた袋を置き、その中からお好み焼きの入つた容器と割り箸を取り出す。

ソースとマヨネーズ、青のりの匂いがいい感じに食欲をそそる。

「いただきます」

今だけはお金をくれている政府の方々へ感謝し、お好み焼きをつついていく。箸で一口サイズに切り分け口の中へ運ぶ。

熱くて口の中をやけどしそうになるが、それでも水で流し込むようなことはせず、咀嚼して飲み込む。

肉、野菜、麺が綺麗に合わさつた味がたまらなく美味しい。本当にこの料理を考えた人は天才だと思う。味もいい上に栄養バランスも悪くない、それがひとつつの皿で出てくるんだから脱帽なのだ。

「ふいー…おなかいっぱいだ…」

1人前のお好み焼きを平らげ、少し膨らんだお腹をポンと叩く。満腹感が凄く、少し動きづらいがさつきと片付けてゲームをプレイしたいので勢いをつけて立ち上がる。

プラスチック製の容器は水で洗い流し割り箸の袋と共にゴミ袋へ入れ、袋も同様にプラゴミの袋へぶち込む。

片付けを終えた俺は、再び2階へ戻りゲームをプレイするためにパソコンを立ちあげようとする。

「げつ！ そういうお好み焼き食つたらこうなるの忘れてた…」
が、ディスプレイに写る歯に青のりが引っ付いている自分の姿を見

て、ダツシユで洗面所へ駆け込み、歯ブラシを手に取る。

虫歯になつた経験がある俺は、二度とあんな痛みは味わいたくないので丁寧に歯を磨いていく。

磨き方は昔学校や子供向けの番組で教わつたやり方だ。

シャコシャコと音を立てながらの歯磨きが終わり、再び自室のゲーミングチェアに座り込む。

パソコンの電源がつくあいだにヘッドホンを装着する。

そして、いつものよう^tに4t04を立ち上げ、チームバトルではなくランダムマッチングを選択。

いつもはぴーすけ達、固定メンバーとやるのでチームバトルを選択するのだが、今は残念ながらぴーすけ達は学校にいる。

そのため仕方なく今4t04にログインしているユーザーとランダムにチームを組みバトルするランダムマッチングを選択。他のユーザーを探している間に、ヘッドホンをもう一度被り直し、コントローラーを強く握る。

「さあ、いつちよ派手に暴れてやろうぜ」

最近見たアニメの気に入つたセリフを吐きながら、俺はゲームを開始した。

■ ■

「…多分隠れるとしたらここしかないと…つと！ いたいた」

ゲームのキャラを動かし、フィールド内のオブジェクトの裏側に回り込むと、予想通り銃を構えていた敵を発見。

コントローラーのボタンを押し込みA^{アサルトライフル} Rを射出。ガガガガツと音を立て弾が敵を貫き血飛沫が舞う。

敵の体力が0になり、”ソラがガンマを撃破しました”と画面に表示され、リザルト画面へ移る。

「よつしや、勝ちだ勝ち」

この試合の戦績は2キル0デス、残り友軍は1、まづまづの戦績だ。ランダムマッチングということもあり、連携が全く取れていない相手も多かつたのでなんの自慢にもならないが、それを差し引いても今日の戦績は中々に良かつた。

「そろそろ疲れだし、一旦やめるか」

お昼にお好み焼きを食べてからずつと4時04分をプレイしていたらいつの間にか既に時計は17：00を指していた。

日はもう沈みかけており、鮮やかな茜色が空を覆う。

窓からチラリと外を眺めると、学校帰りの高校生や中学生が歩いていたり、自転車を漕いでいるのが見える。

こんな病氣にさえかからなければ、俺も竜達と一緒に居られたんだろうか。なんて事を考えて少し心が沈む。

俺の友達も知り合いも、みんな進学して新しい生活を楽しんでいる。そろそろ体育祭が始まる時期があるので、きっと汗だくになつた高校生達が帰る姿を目撃することも多くなるだろう。

「俺だつて……なあ……」

俺だつて、その先の言葉は出てこなかつた。

横目でさつきまで付けていたパソコン、さつきまで座つていたゲーミングチェアを眺め、フツと自らを嘲笑する。

何が俺だつて、だ。俺は逃げただけじゃないか。

体は変わつてしまつたけど、健康体ではある。戸籍は男の頃のものではなくなつてしまつたけど、それでも女としての戸籍はちゃんと作られていて。お金だつてあるんだからどんな学校にだつて行ける。勉強はちゃんとしていたんだから、編入試験でもなんでも受けることだつて出来たはずだ。

何だつてできた筈なのに、逃げて、ぐずつて。そのくせ今楽しんでいるやつを羨ましがる。

そんな自分の醜さに嫌気がさすくせに、外に出ようという気にもならず、ただ延々と同じような時を過ごしている。

父さんや母さんだつて、今の俺の現状を良くは思つていらないだろう。できれば学校にだつて行つてほしいだろうし、そうでなくとも「偶には外に行かない?」とよく聞かれるので、外に出てみてほしい気持ちはあるはずだ。

「ホント…なにやつてんだろな…俺」

何かを言い訳にして、怖いものから逃げて、誰を羨ましがつて、吹つ

切ることも出来ずにただ自己嫌悪に浸る。

ゴロリとベッドに転がり、布団を抱きしめるようにして中へ潜り込む。

布団の中で顔を歪め、声を押し殺して涙を流す。

声を出さなかつたのは自分の中に残っていた、最低限のプライド、男心だつたのかもしれない。

「ピロン

「……？」

その時1件の通知が入る。通知音が鳴りタブレットの画面がつく。そもそもと布団の中から手を出して、タブレットを手に取り確認する。どうやらまぐまさんからのチャット通知だつたらしい。

俺の朝送つたチャットに返信がきたのだろう。俺はチャットアプリを開いてまぐまさんからの返信を確認する。

『了解。都合が合わないのなら仕方ないよな。また次やる時にでも来てくれ。』

『ありがとう、行けなくてごめん』

『いいつて。でも、もし当日予定が変わつてこれるようなら是非来てくれよな。ぴーすけの奴お前がこないつて聞いたらすぐ一ガツカリしてたから』

俺が打ち込んだチャットに対して、まぐまさんがそうチャットを打ち込み。週末オフ会で集まるであろう場所を教えてくれる。
俺の家からだとバスで20分くらいのところにあるファミレスみたいだ。

『うん、もし当日予定が変われば行つてみるよ。本当にありがとうな』

俺はもう一度まぐまさんにありがとうと打ち込み、チャットアプリを閉じる。

ああは言つたが行くつもりなんて全くと言つていいほど無い。

今まで男として接してきたし、まぐまさん達も俺がこんな姿だとは夢にも思わないだろう。

騙していたことがバレればきっと一緒に遊んでくれることもなく

なるだろうし、こんなふうにチャットでのやりとりすらできなくなってしまうかもしない。

そうでなくとも、女だとバレれば態度の一つや二つは変わるだろうし、変によそよそしくされるのは嫌だった。

「でも……もしも…」

それでも、もしも、万が一、あいつらが俺が女だと分かっても今まで通りに接してくれる。変わらずゲーム仲間として遊んでもくれるというのなら…。

「なんてな…そんな事あるわけないのに…」

ぶんぶんと頭を振り、ありえない妄想を振り払う。

そして、俺はもう一度深く布団を被り直した。

3話　せんにゅう！

——ブロロロロロ

少し重めのエンジン音が鳴り響き、窓の外の景色がゆっくりと動き出す。それに合わせて座っていた俺の体も慣性の法則に従つてグラリと動く。

「おつと…」

傾きかけた体を少し力を入れて元の体制に戻し、座り直す。
これから不安を紛らわせる為に何の変哲もない外の景色を眺める。

時速30～40kmでのんびりと走っているバスの窓から見る景色は、いつも自分の部屋から見ている景色とは違い、何か別の世界のように感じます。

まあ、見ている場所が違うのでそりや違うだろと思うかもしないがそういったものとは少し違う。

「外に出るのなんてホント久しぶりだ…」

そう小さく呟く。

青少年引きこもり記録を半年間更新し続けていた俺こと橋空たちばなそらは今日、引きこもり記録の更新を打ち止めることに成功した。つまり、外に出ることが出来たのだ。

今まで引きこもっていたくせにいきなりどうして外に出る気になつたのか、と言われば特に理由はない。

強いて言うなら今の自分を少しずつでいいから変えていきたいという思いからだ。

決してやつぱりびーすけ達に会いたくなつたとかそういう訳ではない。

ただ、俺がたまたまバスを降りた場所がオフ会をするであろうファミレスの近くで、たまたま俺が散歩したい気分になつて、たまたまその近くを通りかかつてしまつたのならその限りではないのかかもしれないが。

それに、万が一通りかかつたとしても会うつもりなんて全くないの

だ。会つてしまえば俺が今までネナベをして騙していたことがバレてしまい、今まで通り一緒にゲームをするなんてことは出来なくなるのは目に見えている。いくら仲がいいと言つても半年程度の付き合いしかない上ネット上だけでの友達だ。ちょっとした事で嫌われてもおかしくはない。

流石に「あいつらはそんな事気にしないはず」なんてお花畠みたいな考えをしている頭ではないのだ。

万が一通りかかったとしても顔をチラツと見てしまうくらいだろう。

「そう…会うわけじゃない、だから大丈夫…大丈夫だ…」

会うわけじゃない。ただ、散歩に行くだけだ。

チラツと顔を見てしまうかもしれないがそれだけだ。決して会うわけじゃない。

自らに暗示をかけるようにボソボソと呟き、深呼吸をする。

「ママー！あの人すつごいあやしい！デビルラー幹部みたい！」

「…こらー！何言つてるの！…ごめんなさいこの子変な事ばっかり覚えちゃつて…」

不意に目の前に座っている子供に指をさされ、少しの間困惑するが、自分の格好を鑑みてああ、なるほどと納得する。

俺の今の格好は薄い茶色の帽子を深く被り、サングラスとマスクを装備し、薄茶のコートを着ている。しかもコートは親父の部屋から拝借したものなので俺の膝下までを覆っている。

こんなのはどうみても不審者だ。警察に見つかれば即職質されること間違いない。

あまり人に顔を見られたくないからってこんな服のチョイスはなかつたなあ…。

俺は小さな女の子にまるつきり悪の幹部みたいな名前で呼ばれてがつくりと肩を落とす。しかも横のお母さんはがさごそとバッグを漁っている。もしかしなくともケータイを探しているのかもしれない。

「怖がらせてごめんね、俺、実は日差しに弱いんだ」

やましい事がないとはいえたが、通報されると流石に困る。

俺は仕方なしに帽子とサングラスを取りマスクを下にずらす。

「わあ！　おねーさんきれー！」

「まあ、ホント」

女の子の反応はさつきと真逆のものになる。母親も同様だ。容姿は武器と言うが本当にその通りだ。

「本當だ、可愛い」

「綺麗な子だなあ、なんであんなカッコしてんだろうもつたいね」

「さつきの会話を聞いてなかつたのか？　なんでも日差しに弱いんだとさ」

バスの中で女の子のあんな大きな声が聞こえてきたら誰でもその方へ一瞬は注目するだろう。

幼女の一言でバス内の人間の目は一斉に俺に向かられる。

「うええ…!？」

今は外に出ているが、昨日までの俺は引きこもりだつたのだ。人の目にに対する耐性の低さは伊達ではない。

恥ずかしさのあまり俯いてしまつた。今、俺の顔はりんごのように赤くなつていることだろう。

こちらに聞こえないように小さな声で話しているつもりなのだろうが、こんな狭いバスの中では全てが筒抜けだ。好意的な発言であることは分かっているのだが、やれ可愛いだのやれ綺麗だと連呼されて恥ずかしくならない人はいないだろう。そんな人はよほど自分に自信があるかアイドルかなにかだ。童貞かけてもいい。

「次は○○へお降りの方はボタンを押してお待ちください」

「つ！　降ります！」

思わずそこから助け舟がやつてきた。ここは俺が降りるバス停なので車内の視線から逃げるようボタンをタツチする。

それに反応しバス内の電光版に”次○○に停車します”と表示される。

こんなとこ1秒だつてもう居たくない、すぐにでもバスから出られるよう立ち上がる。

こんなとこ1秒だつてもう居たくない、すぐにでもバスから出られるよう立ち上がる。

「バイバイ！おねーさん！」

「ば、ばいばい！」

プシューと音を立ててバスが目的の場所に停車する。手を振つて

いる女の子に手を振り返し、早足でバスから駆け下りる。

代金は450円、現代日本の15歳には痛い出費であるが、政府から援助を受けている俺には大したダメージにならない。

だからといって無駄金を使つていい訳では無いけどね。

「ありがとうございました」

停車したバスが動き出し、次の停留所へ向かう。

除けていたサングラスとマスクを再びつけ、帽子を深く被り直して歩き出す。

あんな視線はもうこりこりだ。あれなら不審者と勘違いされる方がちよつとだけマシかもしない。

いや、それはないか。うん、ないな。うん。

この問題は今度家でじっくり解決するとしよう。

「ふう……ようやくここまできた。」

家から出てまだたつたの30分くらいしか経っていないのに、自分の中では4時間もたつてているように感じる。

半年もの間家から出ることがなかつたのだ。バス停に辿り着くまでに何度もやつぱり帰ろうと思つたし、何度も家に吸い込まれそうになつた。

バス停についてもバスが来るまでの間立つたり座つたりを繰り返してた。傍から見たら完全な不審者だつただろう。

それでも、なんとか耐えに耐えてようやくここまで辿り着いた。PGで言うなら魔王の幹部を1人倒したような達成感がある。

目標低すぎるだろと思うかもしれないが、引きこもりにはここまでくるのも一苦労だ。賞状貰つてもいいくらいだ。

思わず少しガツツポーズをとるが仕方ないだろう。

「うわ、なにあの人…」

「見るからに怪しいぞ…」

「なんでガツツポーズ？」

通りの真ん中でこんな怪しい格好でガツツポーズを取れば、周りのこの反応は当たり前と言えるだろう。

バスの中のさつきの人達の反応とは真逆の視線が俺の全身に突き刺さる。

やつぱりこういう視線よりはまだ好意的な視線の方がマシだった！

「～～～！」

怪しい格好をしている自分が悪いのだが、つい周りを人達を睨んでしまう。

延々とこの視線に晒されるとストレスが溜まつてしまいそうだ。さっさと退散することにしよう。

バッグを肩にかけ直して早足で駆け出す。

散歩するコースはあらかじめ決めてある、迷うことはないだろう。多分。万が一迷つてもケータイのDoodlēマップがあるし大丈夫だ。

タツタツタツとスニーカーが軽快な音を立てる。一刻も早くあの視線から逃れたかったので全速力で走る。

久しく運動という運動をしていなかつたため、半年前より速度は断然遅い。50メートル走のタイムを計つても10秒を切れるか怪しいだろう。

これが元サッカー部部員の足の速さだと思うと泣けてくる。

「あ……こ……ひーすけ達の……いつの間に……」

夢中になつて走り続け、気がついたらオフ会の場所であろうファミレスについてしまった。

時刻は12：00 オフ会開始予定時刻の12：30まで30分もある。久しぶりに走つて喉も乾いたし、何ならお腹も空いた。

30分もあれば軽めの食べ物くらいは食べられるだろうし、あつちは俺の顔を知らないのだ会つたとしても分からぬはずだ。

「大丈夫、多分大丈夫」

意を決してファミレスの扉を開く。それに反応してカラランコロンと音が鳴り、店員がやってくる。

今どきこんな古典的な仕組みも珍しいな。

「いらっしゃいませ、おひとり様でしようか？」

「あ、ひやい、そうでしゅ…」

見たら1人つて分かるだろうが、とは決して口にはしない、思つても口にしてはいけない。あつちだつてお仕事なのだ。

「喫煙席か禁煙席がございますが」

「禁煙で…」

タバコの匂いは苦手だ、なんというか少し鼻にくる。

「でしたらこちらの席をお使い下さい」

そう言つて店員さんが案内してくれたのは、禁煙席の4人用の席だつた。

俺は一礼して席に座る。

雰囲気は悪くなく、テーブルやイスはホコリひとつなく清潔にされている。

ここまで清潔にするのは大変だろうに。

しっかりと清掃されている飲食店は美味しいイメージがあるので、期待しながらパラパラとメニューを捲る。

「決めた」

注文が決まつたのでボタンを押して店員を呼ぶ。10秒も経たずに店員が飛んできてペンを構える。

「（ご）注文お伺いいたします」

「えつと、このハンバーグランチとメロンクリームソーダお願ひします…」

「ハンバーグランチとメロンクリームソーダですね。かしこまりました、少々お待ちください」

店員さんはメモを持って厨房の方へ戻る。出来上がるのはもう少し先だろうし、”呟いたー”でも眺めておこう。

画面をスクロールしてフォローしているユーザーの呟きを確認する。

来月の4月4日のアップデート情報の1部や、今度2期が放映される孤独の聖女の放映日時、放送局等の情報が流れてくる。

そういうや、ぴーすけとあるふあーはこのアニメが相当好きだつたような気がする。

「お待たせいたしました、こちらハンバーグランチとメロンクリームソーダでござります」

「あっ、どうも」

しばらく咳いたーを眺めていると、出来上がった料理が運ばれてくる。焼けた肉の匂いと、甘いクリームソーダの匂いが食欲を刺激する。

『オフ会そろそろ着くー』

「つー！」

ナイフフォークを手に取り、ハンバーグランチをいただこうとしたが、ぴーすけの咳いたーの咳きを見て体が固まる。

心臓がバクバクと音を立て呼吸が荒くなる。頭の中がぐるぐる回つて思考がめちゃくちゃになる。

「…………やつぱり帰ろう」

ナイフフォークを置き、伝票とバッグを持って立ち上がる。

手をつけていないランチとクリームソーダはもつたいないが、それは我慢しよう。

バレないとと思うけど、もしバレたらと思うと怖いし。なによりぴーすけ達から見えない場所でコソコソとあいつらの事を見るのはなんだか失礼な気がする。

あいつらは俺を信用してオフ会に誘ってくれたのに、来ないだけならまだしも嘘をついて隠れて見るなんて最低だ。

思いとどまれて良かつた。このままぴーすけ達を見えしまえば罪悪感で押しつぶされるところだつただろう。

俺はそそくさとレジまで早歩きで進み、財布を取り出す。

「あの、お会計お願ひします」

「はい、ハンバーグランチとメロンクリームソーダで1800円になります」

「2000円で、お釣りはいいです」

「えつ？ ちょっと！ お客様!?」

俺は店員に1000円札2枚をポンと置くと、そのまま逃げるよう走り出す。お金が足りないのに逃げたのなら問題だが、余分に払うだけならちよつと迷惑にはなるだらうけど悪いことではないだろう。後からお客様お釣りを！ と声が聞こえてくるがそれを振り切つて出口の扉へ進む。

——ドンッ！

「つてえ！」

「いっ！ ゴ、ゴめんなさい急いでて」

外へ繋がる扉を開けて、勢いよく飛び出したら、中へ入ろうとした人にぶつかつてしまつた。

そのせいで帽子やサングラス、その上スマホまで落としてしまつた。そこまで勢いよく飛んでいつた訳では無いのでスマホの画面は割れとはいふと思うがそれでも少し不安だ。

とりあえず、ぶつかつてしまつた少年に二三度頭を下げて近くに落ちてる帽子に手を伸ばす。

「俺の方もごめんね、ちょっと気分が上がつてちやんと前見てなかつたかも」

そう苦笑いして、目の前の少年は俺のスマホとサングラスを拾つてくれる。

走つてた俺が悪いのになんていい子なんだろうか、大事な友人を騙している自分と比較して少し憂鬱になる。

「あの、スマホとサングラスありがとうございます…それとぶつかつてごめんなさい」

もう一度ペコリと頭を下げ、サングラスとスマホを手渡してもらおうと手を伸ばすが、何故か目の前の少年は固まつてしまつた。

なにやら俺の呟いたーの画面を凝視している。

おいおい、人のSNS勝手に除くなんて最低だぞ。そりや画面つけっぱなしでポケットに入れてた俺も悪いけどさ。

「え……嘘……もしかして、ソラ……？」

「え、なんで俺の名前知つて……」

そんな疑問を抱き、脳がフリーズする。まるで理解したくない事実

を目の前に突きつけられたかのようだ。

「おーい、ぴーすけそんなに走るなよ」

「せつかちだなあ」

するとそんな声が聞こえてくる。ここまでくればどんなバカでも嫌でも理解するだろう。

「ま、まさか……お前……ぴーすけ……？」

絶対に会うつもりなんてなかつたのに、俺はぴーすけ達と出会ってしまった。

震えた声での質問に、ぴーすけと思わしき少年はぎこちなく頷いた。

4話　おふかいつ！

「うう……」

ぴーすけの手を振り切つて逃げようと思ったのだが、咄嗟に手を掴まれ、「どりあえず、中……行こうぜ……？」という言葉に頷くしかなく、そのままなし崩しでファミレスの中に戻つてしまつた。

戻つてきた俺は店員さんからお釣りの200円を強制的に受け取らされ、手付かずのハンバーグランチとメロンクリームソーダが置いてある席に戻ることになった。

クリームソーダのアイスは少し溶けかかっていたので、気まずい雰囲気の中アイスをつついていく。バニラアイスの甘みが俺の緊張をほぐしてくれ、なんとか平静を保つことが出来ている。

「それで…お前…本当にソラなのか…？」

「ひゃい！」

いきなりからまぐまさんと思わしき人から話しかけられ素つ頓狂な声を上げる。

「呴いたーのアカウントがソラのだつたから多分間違いないと思う

⋮

「本当かぴーすけ？　見間違いとかじやないの？」

それにぴーすけが答えるふあーと思わしき人が首を傾げる。

いつも通話で聞いている声だから間違えようがないが、もしかしたら別の人かもと願わざにはいられなかつた。

「間違つたら悪いから、少しだけ呴いたーのアカウント、見せてもらつてもいいかな？」

そう言われて嫌ですなんて言えるわけないじゃないか、嫌だと言えば俺がソラであると暗に認めることになるだろうし、見せたら見せたで俺がソラというのは分かつてしまう。

「わかつた…」

結局俺はこれ以上印象を悪くしないように素直にスマホを見せることしかできなかつた。

アイスをつつく手を止め、ポケットからスマホを取り出して呴い

たーを起動。その画面を3人に確認させる。

「マジか」

「わーお」

一度見ていたぴーすけは何も言わなかつたが、まぐまさんとあるふあーは驚いた。というような表情をしていた。

気まずくなつた俺はストローを咥えてメロンソーダを飲む。

「……」

全員何を話していいのか思いつかないのだろう、このテーブル席は酷く静かで、俺がストローをすするチューという音だけが聞こえる。「あ、あのさ」

その沈黙を破つたのはぴーすけだつた。

苦笑いを浮かべながら、俺の顔を覗き込み声をかける。それに対して俺は俯くことしか出来ず、キュツと口を締める。

こんな事になるなら最初から外になんか来るんじやなかつた。皆が楽しみにしてたはずのオフ会が俺のせいで台無しになつてしまつた。

自らの自分勝手さに嫌気が指す。

「その、なんで男のフリなんかしてたんだ…？ 悪いとかじやなくて単純に気になつてさ…」

ぴーすけは俺を気遣つてくれてるのだろう。

だが、今はその優しさが、気遣いが逆に辛かつた。

俺が悪いのに、俺が来なければこんな雰囲気にはならなかつたのに、ただオフ会を楽しみに来たぴーすけに気を使わせていることが情けなくて涙が出てくる。

「バーメンつ…！ 俺……お前らをつ…騙してた……！」

嗚咽混じりにそう言葉を絞り出す。

限界だつた。この空気に、視線に耐えきれなくなつて懺悔するよう言葉を吐き出す。

一度吐き出してしまえばもう止めることは出来ない。もう騙し続けるのは辛い、嘘を吐き続けるのも辛い、自分を偽つたままこいつらと関わり続けるのが辛い。

辛いことから逃げたい、もうすべて話して楽になりたい一心で、俺は次々に言葉を吐き出し続ける。

自分の居場所がなくなつたこと、居場所をネットの中に求めたこと、男として扱われたくて性別を偽つていたこと、お前らと同じように学校に行つているなんてまるつきり嘘だということ、本当はオフ会なんて行くつもりがなかつたことも全部、全部話した。

流石に性別が変わつてしまつたことについては口止めされているため、本当のことは言えなかつたが、ある意味性同一性障害のようなものがあるのでそう伝えた。

「これで全部だよ……。最低だろ……、俺ずっとお前らを騙してたんだぜ……？」

終わつた。そう思つた。

もうこれで完全に嫌われただろう。もう一緒にゲームすることも話すこともないだろう。

バレてしまえばそなるのは分かつてはいたはずなのに、改めてそう理解するのは大分堪える。

こいつらは今どんな顔をしているのだろうか。怒りの表情だろうか？ 淫蔑の表情だろうか？

俯いているから分からないが、まあ、いい顔をしていないことだけは確かだらう。

「いや、別に？」

「気にしねーよそんなこと」

嫌われるのも、怒声を浴びせられるのも覚悟していただけに。そんな風に軽い言葉をかけられて困惑してしまつた。

「えつ……？」

気にしてないわけがない。だつたらさつきまでの反応はなんだつたのだ。

そう思う反面、今のこいつらが俺を気遣つて嘘を吐いてるようには思えなかつた。

「な、なんでだよ!?」

「なんでつて……そりや誰にだつて隠し事ぐらいあるだろ。俺だつて

年齢1歳偽つてたし

「え!? まぐまさんまさかの年下!?」

「中坊なわけねえだろ！ お前らの一個上だ！」

「あだだだだだ!!」

まぐまさんを一個下だと勘違いしたあるふあーが大きな拳で頭をグリグリされている。

拳がめり込んでいるように見える。なんというか凄い痛そうだ。

「そうだな…俺だつて優希…あるふあーと中学校一緒だつたこと言つてなかつたしな」

「えつ、それ言うの!? 中学生にもなつてドラ○もんの映画で号泣した一真くん！」

「それは今関係ないだろ!?」

そういうや通話始めたばかりの頃はぴーすけとあるふあーは互いに遠慮がないような感じがしてたけど、そういう理由があつたのか。

というかこいつらサラッと本名言つてるけど大丈夫なのか…。

「僕は今でも覚えてるよ、『ぴーずげええええ!!』なーんて叫んでびっくりしたご近所さんが飛んできた事も」

「ぶつ！」

「やめろお！ やめろお！」

あるふあーが更に続けてぴーすけの黒歴史を暴露する。まぐまさんは吹き出し、ぴーすけは顔を真っ赤にしてあるふあーに掴みかかる。

揺すられて頭がぐわんぐわんと動き、あるふあーが目を回し、笑いながらテーブルに突つ伏す。

「もしかしてぴーすけって…」

「そう！ 多分ソラの思つてる通り、ド○えもんの映画に出てきた恐竜だよ。ぴーすけってあだ名は一真の黒歴史から来てるのさ」

「ぶはつ！ あははは！」

「まぐまさん笑わないでくれよ！」

我慢出来なくなつたまぐまさんが盛大に笑い出す。腹を抑え目に涙を浮かべながら大口を開けている。

ぴーすけは余程恥ずかしいのか赤く染まつた顔を手で隠す。

「ふふつ……あは、あははは！」

俺は今の自分の状況を忘れて笑い出してしまつた。

映画で号泣して近所の人が飛んでくるつて…恥ずかしすぎるだろ。確かにあの映画は泣けたしいい内容だったけど、中学生にもなつて大声を上げて泣くというのは少し可笑しくて笑つてしまふ。

心の中でぴーすけに申し訳ないなと思いながらも笑いをこらえることが出来なかつた。

「おお……」

するとさつきまで爆笑していたまぐさんが俺を見て驚いたような表情を浮かべ、それにつられてあるふあー、ぴーすけもこちらを向く。

「あつ……その…」

思わずつられて笑つていたが、今の俺の状況を思い出して再び口を噤んでしまう。

やつてしまつた。いくらあいつらが笑つているからつて、こいつらを騙してた俺が笑つていいわけがないだろ。さつきよりもずっと印象が悪くなつたかもしぬないと頭を抱える。

「笑つてた方がいいな…」

「え？」

ぴーすけがいきなりそんな事を呟く。

「うん、僕も笑つてるソラの方が好きかな」

「同感だわ」

あるふあーとまぐさんはぴーすけの言葉に同意するようにうんうんと頷く。

何故かは分からないが、俺が笑つたことに対する負の感情は抱いていないようだ。

いや、何故かは分かつているのかもしれないが、ありえない選択肢だからと自ら除外していたのかもしれない。

「まさか……本当に怒つてないのか……？」

「当たり前じやん、気にしねーつて言つただろ？」

「そうそう、僕達だつて隠し事してたんだし」

まぐまさんとあるふあーが呆れたような笑いを浮かべる。

「じゃ、じゃあなんで最初あんな空氣だつたんだよ！」

気にしてない、嫌われていないと言うのなら、最初のあの沈黙はあの視線はなんだつたのだと問う。

気にしていないのであれば、最初のあの空氣に説明がつかない。

「あー…いや、男だと思つてたら、びつくりするくらい可愛くて固まつてたんだよ」

「は…!？」

ぴーすけが頭をかき、気まずそうに目をそらしながらそう言葉を漏らす。

それに対しても俺は一瞬思考が停止して固まってしまう。

「分かる。僕も最初フイリアちゃんが2次元から飛び出してきたのかと思つたし」

そして、あるふあーがぴーすけの言葉にそう付け足す。

その言葉でようやく理解した。

こいつらはただ、俺の姿が予想していたものと大きく違つたから困惑していただけなのだ。

確かに俺も男だと思つていた人が実は女人の人だつたらびつくりするだろうし、戸惑つたりもするだろう。しかもこんな真っ白な髪の毛をしていたら尚更だ。

つまり、最初のこいつらの反応や空氣は俺に対して怒つっていたというわけじやなかつたのだ。

「はは…マジかよ…」

それを理解すると今まで力んでいた体の力が抜けていく。

絶対に嫌われると思っていた。バレたらもう遊べないと思つていた。

でも、それは全て俺の杞憂だつた。

こいつらはこんな俺でも受け入れてくれるくらい優しかつたんだ。

それなのに勝手に怖がつて勝手に勘違いして、自分のアホらしさに笑つてしまふ。

「…オフ会ホントは来るつもりなんてなかつたのも怒つてない…

？」

「そういう事情があつたんだし怒らねーよ」

「ネナベしてたのも気にしてない…?」

「気にしてねーって、何度も言つてるだろ？　まあ、ちょっとびっくりはしたけどな」

「女のくせに男みたいに扱つて欲しいとか気持ち悪くない…?」

「大丈夫だよ！　今までと同じの方が話しやすいし、気持ち悪がつたりなんて絶対しないよ！」

1つずつ確認するように質問を投げ続ける。ぴーすけもまぐませんもあるふあーも全部俺の欲しい答えを言つてくれる。

悩んでいたことが、不安が1つずつ解消されて、心が軽くなつてくる。

そして、最後に1番聞きたかった質問をカラカラになつた喉から絞り出した。

「…これからもっ…！同じように遊んでくれますか…!?」

「「「もちろん！」」

「…ありが…とお…！」

限界だつた。ずっと騙し続けていることが辛かつた、全て話した時嫌われるんじやないかと思つて怖かつた、もう一緒に遊べないかもしがれないと不安になつた。

その全てから解放されて、安心して、視界が滲む。

「あー、泣くな泣くな」

「ちがつ！　泣いてねえよ！」

「そーだよ、ソラはドラえ○んで大泣きした一真とは違うのさ」「いつまでそのネタ引つ張んだよ！」

泣いてない、なんて口では言つてるけど、俺の目からはボロボロと涙が溢れ出し、頬を伝つてテープルや床を濡らしていく。きつと今の俺の顔は酷いことになつてているだろう。

「ぐしょぐしょじやねえか、ほらティツシユ」

「あり…がと…」

まぐさんが押し付けるようにして俺にポケットティッシュを手渡す。

ありがたくそれを受け取り、涙や鼻水を拭っていく。

辛いから、苦しいから、悲しいから泣くものだと思つていたが、人間は嬉しくても涙が出るみたいだ。ここしばらくこんな泣き方していなかつたからすっかり忘れていた。

「あーあ、話してたら大分時間すぎてんじやん」

「ホントだ、もう1時」

「1時つて聞くとめっちゃお腹すいてきた」

ぴーすけか腹を擦りながら、メニュー表を眺め出す。あるふあーもその横から覗き込むようにして眺めている。一方まぐさんは別のメニュー表を手に取つて眺めている。

3人とも1分くらい悩んで決まったのか、ボタンを押して店員を呼びつけた。

「俺、このステーキセットお願ひします」

「じゃあ僕はこのミートソースパスタで」

「オムライス1つ」

各々が自分の食べたいものを注文する。もう出来合いがあつたのかそれとも急いで作つたのかは分からないが頼んだものはすぐに届けられた。

「ソラは頼まなくて良かつたのか？」

鉄板からジュージューと音を立ててているステーキを切り分けながらぴーすけがそんな事を聞いてきた。

綺麗に切り分けているのに、その目はしつかりと俺の方を向いていて器用だなあと感心してしまう。

「うん、俺はまだこれ食べ切つてないから」

俺は自分の前に置かれている冷めたハンバーグランチを指さす。香ばしい匂いを発していたハンバーグは見る影もなく、ライスの方も冷えて少し固くなってしまつていてる。

どう考へてもあまり美味しくはないだろう。

「でもそれ冷めきつてるぞ」

「僕のパスタちょっと食べる?」

「大丈夫だつて」

あるふあーの申し出をやんわりと断り、冷えたハンバーグを一口サイズに切つて口に運んでいく。

思つた通り冷えていて、微妙な、なんとも言えない味が口の中に広がる。やっぱハンバーグは暖かいうちに吃るのが1番だ。なんて考えながらまた新しく切り分けたハンバーグを口の中に運ぶ。

「うん、美味しい!」

でも、何故かその冷えきつたハンバーグは、この半年間の中で食べたどの食べ物よりも美味しく感じた。

5話 遊びに行こう

飯も食い終わつて腹も膨れた頃。俺たちは会計を終えてファミレスを後にした。

会計する時の店員さんや他のお客さんからのよく分からぬ生暖かい目がものすごく恥ずかしくて、ぴーすけ達を置いて先に出てきてしまつたのはちょっと悪かつたかなと思う。

その後はぶらぶらと適当に通り道を歩き続けている。

チラリと横に目を向けると、俺と歩幅を合わせて歩いているぴーすけ達が目に入り頬が緩む。

こうやつて誰かと並んで歩くのは久しぶりだから少しテンションが上がる。

「ソラ、どうかしたか？」

「んー、なんでもねーよ」

なんでもない、なんて言いつつも頬が更に緩んできているのが自分でもわかる。

こんなたわいない会話ができることが本当の幸せつてやつなのかもしねれない。

「あ、そういうや俺と優希は話の流れで名前教えちゃつたけど、まぐまさんとソラは名前なんていうんだ？」

「あー…ソラに驚きすぎて自己紹介すんの忘れてたな…。今更感あるけどやつとくか？」

しばらく歩いていると、ぴーすけが思い出したかのようにそう質問する。

ぴーすけとあるふあーは互いの自滅で名前バレしていたが、俺とまぐまさんは流石にそんな馬鹿はやらかしはしなかつた。

まあ、相手の自滅とはいえこつちだけ名前知つてるのは不公平かもしれないし、自己紹介するのは悪くないだろう。

別に名前知られたくない、知られたら困るって訳でもないしな。

「んじゃ、先に俺と優希から！」

「ええ、僕も？」

「いいじやん、いいじやん」

「まあいいけどさ」

一真に催促されている優希は若干怪訝そうな顔をしたもの、すぐに仕方ないと笑みを浮かべる。

やつぱり中学が同じだつたこともあつて仲がいいのだろう。遠慮がないこういう関係つてなんだか羨ましかつたりする。

俺もこんな体にならなきや竜達とこんな関係になれていたんだろうか？

そんな考えを浮かべるがすぐさま振り払う。せつかく楽しい時間になりそうなのに、気分が沈むようなこと考えるのは良くないだろう。

「名前はさつき言つたけど、俺の名前は藤宮 一真つて言うんだ。趣味は：知つてるから言わなくていいか、とりあえず今日はよろしくな！」

「僕は東堂 優希、横の一真と腐れ縁やつてまーす。今日はよろしく！」

一真是ニカツと笑みを浮かべて、優希は肩を組んでくる一真にちよつと鬱陶しそうに親指を向け人懐っこそうな笑みを浮かべる。

趣味云々は呟いた一や他のチャットアプリで何度も話しているので、今更教えてもらう必要もないだろう。

「んじや次は俺か」

元気いっぱいの一真とは正反対に、まぐまさんはダルそうに後頭部をかきながら口を開く。

「俺は新田 浩介 趣味は知つての通りF P S、T P S系統のゲーム、今んとこ4 t o 4が一番好きだ。ネットネームはどこでも”まぐま”で通してるよ」

自分の自己紹介が終わると、まぐさんが俺に視線を向けて「ほら、次はお前の番だぞ」と促す。

それに対しても俺は小さく了解と返して、口を開く。

「俺は橘 空、こんなナリだけど男だと思つて接してくれると嬉しい。あと、外に出るのは久しぶりだからちよつと手加減してくれよ

な

それと、今日はよろしくと付け加えて俺は自己紹介を終えた。

人と面と向かつて話すなんてしばらくしてなかつたので大分緊張したが、嚙まずに言いたいことは言えたので良しとしよう。

半年近く引きこもつていた俺からすれば上出来と言える。

「りょーかいっ！ てか、ソラつてリアルでもソラなんだね。」

「名前とネットネームが同じなのは結構驚いたぞ」

そんな声をかけるのは優希と浩介さんだ。

どうやらネットでの名前とリアルの名前を同じにする人が珍しいらしい。

まあ、確かに普通なら実際の名前をネットネームにする人なんていないだろう。俺だつてぴーすけが本名だつたら驚く。

「あー…それは…」

「それは？」

気になります。と言わんばかりの表情を向けてくるが、ネットネームをリアルと同じにした理由は恥ずかしいからあんまり言いたくないのだ。

だからどうしても歯切れの悪い返事になつてしまふ。

じつとこちらを見てくる優希からバツが悪そうに目をそらすが、あつちはそんなこと知つたこつちやないどこちらを見続ける。浩介さんは遠慮してくれているのか優希のようじつと見てくることは無いが、それでもやはり気になるようで、チラチラと何度もこちらに視線を向ける。

「俺もちよつと気になるなあ」

最後の希望、一真に助けを求める視線を向けたが、残念ながら一真も優希側のようだ。

まさに四面楚歌。きつと歌を聴いていた項羽もこんな気持ちだったのだろう。項羽に対してもうとだけ親近感が湧いた。

観念した俺は大きくため息をつく。話さないと一真達はずつとこのままだろうし、仕方がない。

「別にそんな大した理由じやないんだけど…その、なんつーか、ソ

ラつて呼び捨てで呼んで貰えると、なんか仲良くなれたような気がしてさ……」

俺が性転換してから、名前で呼んでくれたのは親を除けば誰もいない。引きこもる前にちょっと外に出た時にお嬢ちゃんとか君とか、そういうった呼び方しかされなくて寂しさを感じていたのだ。

そりや、完全に誰か分からないくらい変わっちまつたし、もう1回名前を教える勇気も元気もなかつたから仕方ないのだが、それでも友達みたいに誰かに呼び捨てで呼んで欲しかつたのだ。

だからネットだけでも呼び捨てで呼んで貰つてるような気分に浸りたいと思って、ネットネームを自分の名前と同じにしたのだ。実際チャットアプリでソラと呼びかけてもらえるだけでちよつと嬉しかつたし、初めて通話でソラと呼ばれた時は凄く嬉しかつた。長い間通話して遊ぶのは続けていたから慣れたが、ホントに最初の頃は気分が高揚していた。

「「[.]……」」

一真達に視線を向けると案の定固まつっていた。口はだらしなく開いていてポカーンという擬音がついていそなくらいだ。

こんな理由でネットネームを本名と同じにしてたと聞かされたらこんな反応しても仕方がないのかも知れないけど、自分から聞いておいてそれはないだろ。

恥を忍んで話したのにこれは酷い。

「もー！ そんな反応すると思つてたよ！ 思つてたけど、そんな

反応するくらいなら最初から聞くなよな！」

ふざけやがつて、めちゃくちゃ恥ずかしいのを我慢して話してやつたのにこの仕打ちだ。

頬に手を当てるまるで風邪を引いたかのように熱くなつている。バスの中といい、ことといい、今日は羞恥地獄だ。

「ふつ……ふふつ……」

「あるふあ一笑つてんじやねえ！」

遠慮なく吹き出した優希に思わず怒鳴る。無性にムカついたので多少語気が荒くなるのは仕方がないだろう。

「2人もニヤニヤすんなー！」

一真と浩介さんは、優希とは違つて多少は遠慮して吹き出しあはしないものの、ヤケに頬が緩んでいるのが分かる。

抗議の声を上げるが2人は知らないといったように更に笑みが深くなる。

「そつかー、ソラは呼び捨てで呼んで欲しかつたのか」

「確かに呼び捨てで呼び合う関係つて仲良さそうに見えるよなー」「ホントにそう思つてんならその棒読みやめろや！」

加えてこの棒読みだ。完全にバカにしてるのが分かる。

一真にいたつては、自分が弄れる対象が出来て嬉しいのか、嬉嬉として俺の顔を覗き込んでくる。

遂には顔を隠すことなくニヤニヤとこちらを覗きこんでくる一真に俺の我慢は限界を迎えた。

「えつ!? ちよつ、ソラ!?

「びいゝすけえええ!!!」

「あだだだ!!」

俺は丁度いい位置にあつた一真の肩にアームロックを決める。

しばらく運動していなかつたため威力は落ちるがそれでも十分な威力がある。

一真の肩がギリギリと音を立て、少しづつ絞め上がり、ダメージを与えていく。

「ソ、ソラ！ タンマタンマ!! 痛いしなんか当たつてる！ なんか柔らかいものが当たつてる！？」

「悪かつたなあ筋肉なくて！ 最近全く運動してなかつたからなあ！」

「そういうことじゃなくてええええ!?」

暗に俺の腕に筋肉がないとバカにしてくるので、お仕置きとしてもう少し力を込める。

自分でも体の筋肉が殆どなくなつて、ヤケに体が柔らかくなつたのは分かつてゐるのだ。

だが、面と向かって誰かにそう言われるのは始めてだつたしなんど

いうかムカついた。

ちよつと今日から筋トレでも始めてみようかなあ、なんて考えながら腕の力を強めていく。

「ゞめんゞめん！謝るからもうやめて！」

「よろしい、許してやろう」

もうギブアップだと言うので、力を緩めてアームロックを外してやつた。

解放された一真は顔を顰めて肩をさする。

力が落ちて全く効かないかと少し心配したがちゃんと効いていたようだ。

「酷い目にあつた：けどなんか得した気分…」

「自業自得だ。俺は煽られたらやり返すぞ」

「知つてるよ。4t04で煽りプレイヤーにめちゃめちゃやり返してたもんねえ…」

その言葉に優希と浩介さんが、あれは酷かつたと賛同する。

説明すると、俺は一度、対戦して負けた後メッセージで相手に煽られた事があるのだ。それに俺がブチ切れて対戦ルームを立てて煽つてきた相手にもう一度対戦しろとメッセージを送つたのだ。

一度勝つた相手だから余裕だろと思つていただろう相手はまたバ力にしたようなメッセージでそれを承諾。

そして再戦が始まり、俺はそいつを完膚なきまでに叩き潰した。

その後相手から「今のは偶然だ！　もう1回やれば俺が勝つ！調子に乗るな雑魚！」とメッセージが飛んできたので俺は再戦を承諾し、もう一度叩き潰した。

またもう一度、またもう一度と再戦を何度も挑まれたが15回ほど叩き潰した当たりで相手が再戦を挑んでくるのをやめた。

だが、これで終わるわけもなく。俺はその戦績と相手のメッセージの写真を撮り、“呟いたー”にアップ。

そこからは俺のフォロワーや暇人がその呟きに食いつき、所謂バズるというものを経験させてもらつた。

リツイートが5000を超えたあたりで、1部の過激な奴らがその

煽りプレイヤーのアカウントを特定したのだが、その後すぐにそいつがアカウントを消して終わりとなつた。

「酷かつたつて、あれは俺悪くねえぞ」

確かにアカウント消すハメになつた相手にとつては酷かつただろうが、元々煽ってきたあつちが悪いのだ。俺からすればざまあみろといつた感じだ。

「まあ、そんなんだけどさ」

「あれ以来4t04の煽りプレイヤーも大分減つたし、悪いことじやないとは思うよ」

あの咳きは結構有名になつたらしくて、煽つたら潰された上に晒されるかもそれないと怯え煽り行為を行う。プレイヤーはそこそこ減つたらしい。

どつちかつて言うと俺はいいことをしたのでは?とまで思う。

「まあ、ソラの悪行は置いとくとして、そろそろどこ行くか決めよう」

「悪行つてなんだよ!?

ただ、やられたからやり返しただけなのにこの言われようは酷い。しかしここで言い返してしまふとまた余計な時間を食つて遊べる時間が減つてしまふ。

それは俺としても避けたかったので追求することは無かつた。昔話を切り上げて、何処へ遊びに行くかを決めることにする。

「うーん、選択肢が多いから結構悩むんだよなあ」

浩介さんがそう唸る。

確かにここから行けるところと言えば、俺が覚えてる限り、カラオケ、ボウリング、ダーツにビリヤード、今の季節は開いてないがプール、その横にあるバッティングセンターくらいだ。

俺忘れているところもあるかもしれないが、それでもこれだけの数があるので。

故にどこに行くか悩むのは当然つちや当然だつた。

「カラオケはどう?」

「無しじやないが今日は気分じやねえな」

「あー、俺はこの前行つたし」

カラオケは皆乗り気じゃないようだ。一真是この前いつたらしさ
しもう一度行つても微妙かもしれない。

俺としてはこいつらと一緒ならどこでも楽しめそうだしどこだつ
ていいから、とりあえずどこに行くかはこいつらに任せてみようと思
う。

「ボウリング」

「それは俺がこの前行つた

「マジか、噛み合わないなあ…」

ボウリングはボウリングで浩介さんが行つていたらしい。一真的

言う通り大分噛み合いが悪いみたいだ。

久しぶりにちょっとやつてみたかつただけに少し残念だ。

そうして話を進めていくが、ダーツは満場一致で気分じやないとい
うことで無し。ビリヤードは優希が難しくて好きじやないというこ
とでやめになつた。

「こんだけあつて全滅かよ」

「この前行つたとは言つたけど、別に俺はカラオケでも大丈夫だぜ
？」

「でも微妙なんですよ？」

「そりやそりやそこだけど…」

一真是カラオケでもいいとは言つたものの、微妙だというのであれ
ばあまり選びたくはない。

出来れば全員楽しめる場所を選びたいと思うのは仕方ないだろう。
「ソラはなんかいいとこ知つてる？」

「え、っ!? そういうのに関してはお前らの方が得意だろ…?」
急に話を振られて、少し驚く。

なんせ半年近く引きこもつていたのだから最近何が出来たとか、あ
んまり分かつてない。俺が知つてるのは昔からあつた遊戯施設だけ
だ。つまり今こいつらが言つた場所以外に特に思いつくところはな
かつた。

「いやいや、もしかしたら急になにか思いつくかもしれないよ?」

「無茶言うなよ……ん？」

優希の無茶振りに少し頭を巡らせていると、確かに他に何かあつたような気がする。今言つたところ以外でみんなで長時間遊べそなところが。

忘れかけていた記憶を辿り、頭を捻つて、ようやく思い出した。

確かにあった。中学生の時に一度行つた切りで忘れていたが今の

俺たちにうつってつけの場所が

「なあ、お前ら、あれだつたらゲーセンいかね？」

6話 ゲームセンター

「うわ… ゲーセンなんて久しぶりだなあ…」

徒歩10分の時間をかけ、目的のゲームセンターに俺たちは辿り着いた。

自動ドアを通り抜け中に入つた瞬間、メダルゲームのメダルのジャラジャラという音や、格ゲーのボタンを叩く音、クレームゲームのアームが動く音、店内のBGMと遊んでいる人達の声が混ざり合い、凄まじい爆音を奏てる。

「僕も半年くらい来てなかつたけど、やっぱうるさいねえ」

優希が顔を顰めながら耳に手を当てる。

「いつも凄まじいよな」

続けて一真も優希と同じように片手で耳を塞ぐ。

幼馴染だからかどうかはわからないが二人の行動は結構似ているところがある。さつきもゲーセンに来る道を歩いているとき、二人とも左手を必ずズボンのポケットに突っ込んでたり、スマホはなぜか二人とも胸ポケットに入れていたりと、今日初めて会った俺がこれだけ気づくのだから、もつと似ているようなところはあるのだろう。

「んー、俺は結構な頻度出来てるからなあ、そこまで気にはならないな」

どうやら俺達の中で平気なのは浩介さんだけのようだ。自分でこの場所を提案しておいてなんだが、俺は頭に地味な痛みがあると感じるほどにはうるさく感じてしまう。

痛みといつても違和感を感じるくらいのもので大したことはないのだけれども。

「まあ、しばらく居ればこのうるささにも慣れるだろ」

「そうだな、んじゃ、とりあえずなんか探すか」

俺の言葉に一真が同意し、とりあえず遊びたいものを探そうとゲーセンの奥へ奥へ足を踏み入れていく。

当然ながら、昔来た時とは内装もゲームも大きく変わつていて記憶はアテにならない。ゲーセンに来たら必ずやつていたガンシュー

ティングゲームがあつた場所に目を向けたが、撤去されてしまつたのか、それとも別の場所に移されたのか無くなつてしまつていて。どうやら今は音楽ゲームのスペースになつてているようだ。

「お！　YOUR YTHEMじゃん！」

「ん？」一真知つてんの？」

隣に居た一真が音楽ゲームの方に目を向け、声を上げた。

「おう、なんか最近出来た音ゲーらしくてな、太鼓の鉄人みたいにバチとかの道具じやなくてタップしたり、手を揺らしたりして遊ぶらしいぞ？」

疑問形なのは一真もまだやつたことがないゲームだからだろう。

しかし、俺がやつたことのある音ゲーは太鼓の鉄人（太鉄）だけだから道具を使わないとというのはちょっと新鮮だ。

音ゲーは苦手なのだが、一真もやつてみたそうにしているし挑戦してみるのもいいかもしない。

それに苦手だつたのは昔の話で今やつてみれば違う結果が得られるかもしれないからな。

「空と一真是あれやるの？」

「うん、どうにも新しいゲームに弱くて」

そう、俺は新作という言葉に弱いのだ。今までクソゲーばかり作ると言っていた会社のの作品でも、新作と聞くと何故か買つてしまふ程だ。

まあ、結局買つたはいいがつまらなくてすぐに売つてしまふ事がほとんどのだが。

「ふーん、2人がやるなら僕もやつてもようかなあ、まぐまさんはどうする？」

「あー、お前らがやんなら俺もやるわ。1人だけ別行動すんのも嫌だしな」

俺と一真がやる。という事で優希も浩介さんもやる気になつたらしい。

俺達は全員財布から100円玉を取り出し、ゲーム機に向かう。

『さあ、あなたのリズムを奏でよう！　音楽の世界にようこと！』

YOU RYTHEM!!

ゲーム機の前に立つとセンサーが何かが反応したのか、このゲームの謳い文句が可愛らしい声で聞こえてくる。

『いらっしゃい！ 今日はどこを旅しようか？』

100円を入れると画面が切り替わり、モード選択の画面が映し出される。

スタンダードモードとエキスパートモードの2つがあるらしく、難しい方のモードであろうエキスパートモードはちょっと黒いオーラが溢れている。

さすがに初めてやるゲームだし、最初は簡単そうなスタンダードモードの方を選ぼう。

俺は左側のセンサーをタップしてスタンダードモードを選択する。『曲を選択してね！』

ここまで来れば曲選択の画面のようだ。

曲は様々なジャンルに別れていて、アニソンやVOCALOID、JPOP、このゲームのオリジナルソングもあるみたいだ。

「なー空、このゲーム対戦できるみたいだしやらねーか？」

俺達がなんの曲で遊ぼうか迷っている時、横から一真がそう声をかけてきた。

どうやらこのゲームは同じ店内で遊ぶ場合は、同じ曲でスコアを競う事ができるようだ。

「へー、このゲーム対戦あんのか」

「対戦すんのはいいけど、もう残り30秒しかないぞ？」

しかし、対戦する場合は全員が同じ曲を選択しなければならない。残り30秒で全員が知ってる曲を選ぶのは、初めての音ゲーでは酷というものだろう。

「それならこれでいいんじゃない？」

「え？」

3人で唸つていると横から割り込んできた優希がセンサーをタップして勝手に曲を選択した。

優希が選んだ曲を確認すると、俺たちが3ヶ月前から通話を繋いで

毎週欠かさず見ていた【孤独の聖女】のオープニング曲、【黄昏の空へ】だつた。

「おお！　この曲入ってんのか？！」

お気に入りの曲があつたことに気づいた一真は嬉しそうな声を上げる。かく言う俺もこのアニメは結構好きだつたし、オープニングの歌詞やリズムも疾走感があつて中々に気に入つていた。

「じゃあ、初っ端1曲目はこれでいくか」

残り10秒で俺と一真、浩介さんは優希と同じ曲を選択

『じゃあいくよ！　ミュージックスタート！』

そして画面が切り替わり、ゲームのナビゲーターの掛け声と共に曲が始まった。

■ ■

『――♪』

全員でプレイを開始し、2分ちょっと経てば選んだ一曲目はアニメで何度も聞いたリズムを奏でて終了となつた。

そして画面が切り替わりスコア画面が表示される。

どうやらこのゲームにも太鼓の鉄人同様ノルマがあるらしく、その”ノルマスコアに達していれば”ゲームを続けて遊ぶことが出来るようだ。

「ぶつ……だはは！　ソラめっちゃヘタじやん！」

……そう、俺だけノルマスコアに達することは出来なかつたのだ。やはり昔と同じく音ゲーは下手くそだつた、見栄を張つてみんなと同じように難易度を難しくするのではなく、普通かんたんを選択すべきだつた。

そうしておかげ、音ゲーが苦手と思われることがあつても、こんな風に一真にバカにされて笑われることもなかつただろう。

：：：というかこいつ笑いすぎじゃないか？　マジでムカつくんだが？
「もういいかいだ…！」

このまま笑われただけで終われるのか？否、断じて否である。汚名返上名譽挽回、財布から100円玉を取り出し再びゲーム機に投入する。

『どちらのモードで遊ぶ?』

するとまた軽快な音楽と共にモード選択画面へと切り替わる。

ゲームモードは先ほどと同じくスタンダートモードを選択、そのまま対戦モードに移ろうと思ったが、やり直すまでに時間を食つてしまつたため対戦に混ざることは出来なかつた。

『この曲でいいの?』

仕方がないので、自分の好きな曲を適当に探して練習する事にした、ジャンル分けされてある曲のプレイリストを眺めているとこの前発売したノベルゲーム【星空の夜で】のOPもあつたのでそちらを選択。

さつきのようにノルマ達成出来ないとまた100円を入れ直すことになるので、難易度は1段階下げて普通に変更、これなら問題なくクリアできるだろう。

『じゃあ行くよ! ミュージックスタート!』

ゲームパネルに触れれば、先程と同じセリフがゲーム内から流れ、そのまま曲が始まる。

『――♪』

やはりいつ聴いてもこの曲は良い。曲調はゆっくりとしているんだけど、どこか声に力強さを感じる。そんな優しくも力強い歌を耳に入れながら、パネルをタップしていく。

難易度を下げたおかげか、さつきよりも断然やりやすくなつていてミスすることもなく順調に目標までのスコアを伸ばせている。

『――♪――♪』

しかし、サビの部分に突入すると急に操作が増え、ミスが1つ、2つ、3つと増えていく。

こういう時は一度落ち着いて、仕切り直して再開するのがいいのだが、初めてで慣れていないゲームということもあつてそんなことには気が付かなかつた。

そのままスコアは全く伸びなくなり…

『あららら…ノルマ失敗だね』

…そのままさつきと同じようにノルマ達成まで辿り着くことは出来ずに曲が終わつてしまい、なんとも残念な音楽と声が流れる。

まさか難易度を“ふつう”まで下げてもクリア出来ないとは思わなかつた。太鉄の方は普通までならギリギリとはいえクリア出来ていたのに…。

「も、もういつかい…！」

このままクリア出来ずに終わるのは悔しいし、一真にバカにされたまま終わるのはあまりにも嫌すぎる。幸いまだ一真達の方もまだゲームが続いているので連コインしても問題ないだろう。

俺は再び財布から百円玉を取り出し、ゲーム機に投入。

「いや、やめとけって」

「へ？」

そのまま慣れた手つきで曲選択へ移ろうとしたのだが、横から出てきた浩介さんの手によつて、それは止められてしまつた。モード選択を終えようとしていた俺の手は、掴まれたせいでパネルに触れる事はなく、空中で静止している。

「こ、浩介さん…？」

「悔しいのは分かるが、ちょっと熱くなりすぎ」

「うつ…」

そう言わると言葉が詰まる。確かに今の俺はゲーム程度に熱くなりすぎてた。元々楽しむためにお金を入れてゲームをしているんだから、こんな風になつてまでやる必要はないだろう。バカにされたままなのはちょっと悔しいけども…

「別に音ゲーだけがゲーセンのゲームじやねえんだし、他のも沢山遊んでいこうぜ」

「……そうだな」

クリア出来なかつた悔しさに後ろ髪を引かれるけれど、俺のわがままでいつまでも音ゲーコーナーに張り付いてる訳にもいかない。

せつかく楽しい日になりそうなのだから、さつさと切り替えて次のゲームでも探しにいこう。

「…よし！　じやあ浩介さん次はあつちに行こうぜ！」

「つ!? お、おう」

ちようど一真達との対戦が終わつた浩介さんの手を強引に引いて、クレジットが入つたままの筐体から離れていく。

ちらりとゲーセン内を見渡し、興味のないメダルゲームのコーナーとは逆の方向に足を進めていく。

「あつ！ まだスコア見てねーのに！」

「ちよつ、2人で先に行かないでよ！」

プレイした音ゲーの合計スコアの表示を待つていた優希と一真の幼なじみ組は、既に音ゲーの筐体から離れた俺たちを慌てて追いかけてきた。

勝負しようという事で始めた音ゲーだった事を思い出して、待つてやれば良かつたと思うものも、音ゲー下手を笑われた恨みがあるためその考えは捨て去ることにした。

どうやら俺は割と根に持つ方なのかも知れない、なんて考えながら今度はクレーンゲームのコーナーに進んでいく。

クレーンゲームコーナーには、遠目で見たときに俺たちが共通で知つているアニメやゲームの景品がいくつか転がつていたし、退屈することもないだろう。

一真と優希が追いつけるように少し歩幅を縮めながら、なんの景品を取るか、なんてことを考えていた。

……別の場所で何が起きていたかも知らずに…

* *

「空…！ どこ…？ どこにいるの…!？」

「ダメだ！ やつぱり携帯は繋がらん！」

数時間前、空がいた自宅では、今現在、空の父と母が大慌てで空の居場所を探し回っていた。

理由は至極単純で、いつも必ず家にいるはずの空が、家のどこにもいなかつたからである。

先に帰ってきた母のひなたが、いつもなら聞こえてくる、少しくぐもつた空からの「おかえり」という声が聞こえず、不安になつて空の

部屋を覗いてみたら、空はそこには居なかつた。

パソコンを使つて遊んでいるのか誰かと話しているときに座つて
いる大きな椅子に腰かけているわけでもなければ、布団の中で猫のよ
うに蹲つて寝ているわけでもない、なにより、いつも電源のついてい
る大きなパソコンが全く音を立てず静まり返つてゐる。それが空が
今この家にいないことを物語つていた。

最初は、もしかしたら、トイレにいるのかも？それとも早めにお風
呂にでも入つてゐるのかも？なんて考え、家中を探してみたがやつ
ぱり見当たらない。

ジュースやお菓子を買うためにコンビニに行つたのかなんて甘い
希望に縋ろうとしたが、この前の買い物でジュースやお菓子も大量に
ストックされているものがあるし、何より空はここ半年一度も外に出
ていない。

そもそもコンビニに行つたなんて考えて済むようならここまで慌
ててはいないので。

空が家にないと分かると、すぐに持たせてある携帯に電話を掛け
るが、小さな電子音が鳴り続けるだけで、空が通話に出てくれること
はなかつた。

このまま一人でいると、ひなたは言い表せない不安で潰れてしまい
そうだつた。

だから夫である太陽^{ひかる}に電話をかけ、仕事の真っ最中にも拘らず、家
に戻つてきてもらつて今に至る。というわけだ。

「もう一度だ……！」

家中探しても見当たらなかつた、電話は繋がらなかつた、だからと
言つてどこか探しに行けるあてがあるわけでもない。

ただただ空が通話に出てくれることを願つて、太陽は祈るように通
話ボタンを押した。

プルルルル…プルルルル…

ひなたも太陽も、一人して黙りこくつてしまつたこの空間でその電
子音だけが空気を震わせる。

プルルルル…プルルルル…

止むことのない電子音を聞きながら、二人に浮かんでくるのはもつと空と話しておけば、という後悔だつた。

半年前、相思相愛の夫婦とその一人息子のささやかながらも満ち足りていた幸せな生活は、空の急病で一変してしまつた。

性転換病、字の通り性別が変わってしまうふざけた病を患つてしまつた息子は、昔、膝やひじに擦り傷を負いながらも笑つてサツカーをしていた頃とはまるで違う姿になつてしまつて、いた。

短かつた髪の毛は肩を超すほどに伸び、母譲りの綺麗な黒髪も、脱色し真っ白に変わつた。声変りが始まり、出てきていたはずの喉ぼとけはひとつこみ、声は元よりも高くなつた。

そうして変わつていつた息子の姿を見ていつた二人は、空と同じくらいに困惑していくどう接したらいいのかが、まるで分らなかつた。女の子になつたのだからいろいろ教えてあげてくださいね、と医師の方に言われその通りに空に、トイレはどうするのか長い髪の毛の洗い方、そういうことをひなたは教えてきた。

この病気は世間に公表できないため、空が死亡扱いになると宣言され、その代わりに政府からの金銭面での援助が入ると伝えられた。

それに反発しようにも姿の変わつた息子を支えるためにはおそらく多くのお金が必要となる。頭の冷静な部分がそう考えてしまつて、歯を食いしばりながら生きているはずの息子の葬儀を太陽は執り行わされた。

そうしてやらなければならぬ事を終えてしまつた二人は、これからどうしていけばいか分からなかつた。

急に失わされてしまつた人間関係を戻してやることなんてできるはずもなく、寂しさから泣いている息子の声をただただ聴き続けることしかできず、時に空の自室から聞こえてくる「死んでしまいたい」なんて声にもお願いだから早まらないでくれと願うことしかできなかつた。

しかし最近、あの大きなパソコンを購入してから、空は少しづつ回復の兆しを見せていてこのまま回復すれば、昔のような明るい空に戻るかもしれないと考えていた矢先に今日の失踪だ。

もしかしたら自分たちに心配させまいと明るく振舞つていただけ
なのかも知れない。本当はずつと苦しんでいて、今日限界を迎えてし
まつたのかも知れない。

そんな最悪の予想が浮かんでしまう。

「フルルルル

こうして電子音が鳴り続ける時間に比例して、二人の不安も徐々に
膨らんでいく。

「ダメだ…このまま待つていても仕方がない…」

その音を聞いていられなくなつた太陽は、通話終了のボタンを押し
し、今度は別の番号を入力していく。

「警察に…お願いしよう…」

そしてこの国で最も頼れる人たちへの応援要請を開始した。